

新聞小説の発生

——東京絵入新聞を読んで——

本 田 康 雄

要 旨

今日なお新聞で多数の読者が連載小説を読んでいるのは国際的にユニークな、日本人だけの習慣である。その発生に最も関係の深い東京絵入新聞の続きものを考察した。絵入雑報記事の発生、「岩田八十八のはなし」について定説の修正、「金之助のはなし」など創作の続きものの発生、作品名・回数・著者名の表示の形式が決定したのは古川魁蓄子の作品からであること、時代もの（歴史小説）の発生、等について述べた。

この続きものはやがて「小説」（ノベル）という自覚のもとに坪内逍遙によって読売新聞に定着せしめられるが、本稿はその前夜の様相を主として形態（絵入り続き物語）と江戸文芸からの流れに注目して調べたものである。

明治八年四月一七日付で「平仮名絵入新聞」(東京絵入新聞) 第一号が刊行された。発行所は銀座一丁目一〇番地の絵入新聞社で、編輯印務は柳谷藤吉、創刊後しばらくは「隔日出版」であったが、九月から「東京平仮名絵入新聞」と改題して、「日々出版」となり印務編輯代理として高島藍泉の名が掲げられた。社主は落合芳幾であった。この絵入新聞(タブロイド版四頁) 第一号の三面(頁) 下段には鳥取士族の美青年の犯罪を扱った挿絵入り雑報記事が掲載されたが、この絵入り(傍点は本田。以下同じ) 雑報こそこの新聞の眼目であって「活字に絵の版木を組みこむ絵入新聞」はこの「平仮名絵入新聞」(後に東京絵入新聞と改題) の創刊が最初」と小野重忠氏が述べている(同氏著『版画——近代日本の自画像』岩波新書四一一、五八頁)。この絵入雑報記事の工夫の意義については小論「版木から活字へ——稿本の終焉——」(国語と国文学) 昭和六十三年二月号) で述べた。重複するが、その要旨をまとめると、この平仮名絵入新聞の社主・落合芳幾と編集長の高島藍泉ははじめ「東京日々新聞」(明治五年二月二日第一号創刊) の仕事をした。そもそも落合芳幾は条野伝平、西田伝助と共にこの新聞の創設の中心人物であり、高島藍泉も創設の頃からこの社にあった。芳幾と藍泉が中心となって工夫したのが(東京新聞の) 新聞錦絵であり、明治七年から大流行となった。このコンビが作成した新聞錦絵は一枚刷の浮世絵で上欄に「東京日々新聞」の題字があり画面一杯に犯罪現場などの血なまぐさい情景、あるいは珍談、奇談が描かれ、余白に草双紙の書き込みの様な、但しルビ付漢字を使用した分かりやすい文章が書きこまれている。東京日々新聞の犯罪、情痴、奇談の記事などを絵解きしたのである。

芳幾、藍泉のコンビが錦絵新聞の流行に便乗して、この手法を日刊紙に取込んだのが「平仮名絵入新聞」であった。前述した創刊号の三面の絵入り雑報記事の部分は新聞錦絵と全く同種である。ただ、新聞錦絵が絵も文も木版であったのを、木版のイラストと金属活字の本文を組合せた新聞の紙面として作成した点が相違するだけである。平仮名絵入新聞はこの絵入雑報記事の魅力で読まれたのであり、それが芳幾や藍泉の狙いであった。

一 続きのもの——実話の連載

この種の挿絵入り雑報記事の面白さ、その実例については旧稿でも屢記したので重複するがここに一つだけ紹介して論旨を進めたい。

明治八年四月一九日の絵入雑報記事である。

（要旨）蠣殻町の中島座では河原崎国太郎が出勤し、先年田の助がつとめ其のち訥升がつとめたかけ皿の役を演じた。前名鷺助、当時鷺のすね平がかけ皿を責る所がいかにも憎くらしく好演技であった。さる一五日、このかけ皿に同情して本気になった見物人の仕事師が土間から舞台へとびあがりべら棒と言って棒の替りににぎりこぶしをふりあげて鷺（仕事師）が鷺（鷺のすね平）をさんざん打擲したが、そこへ本当の棒を持った警官が駆けつけて忽ち屯所へ連れて行きました。

挿絵は舞台中央で鉢巻をした鷺の職人が鷺のすね平をつかまえてげんこつを振上げているのをクロ子がつとめようとしている場面で三面上段中央に掲載されている。記事は二面下段末より三面上段、三面下段にかかる。この様な版画組みこみの雑報記事によってこの新聞は人気を得たのである。

明治八年九月二日よりはこのまでの四面（頁）仕立の体裁から一枚（両面刷り）仕立となった。項目名は公開（おふれ）、雑報（はなし）、投書（なげぶみ）、物価（そうば）、広告（ひろめ）、外報（いこくのはなし）であり、これまであった「新聞」がなくなつて「雑報」に統合された。この雑報欄中の挿絵入り雑報記事が所謂「続きもの」になつていったと推定されるが、その状況を展望してゆきたい。ここで断つておきたいが、単に連載という意味でなら、明治八年九月七日、同十日、十月九日、同十日にわたつて掲載された『葉武列士』（無署名）が早い。「原書は英国の

狂言作者セーキスビールが名作の正本、抄録は絵入の新聞記者……」と書入れのある「ハムレット」の歌舞伎仕立の翻訳で、第序——丁抹国王城門外の場——御殿の場（九月七日）、城外堀端の場、同統森の場（九月十日）、一か月経って、十月九日には明日からはじめるとの口上があり、同十日に御殿場の筋書だけ示されるが、これで中絶している。序幕以下進行せず、その言い訳の書入れが多い。この『葉武列士』には挿絵がなく、またこの頃、この種の翻訳が流行した形跡がない。西欧文学の翻訳は通説の様に読売新聞の『鍛鉄場の主人』（明治一九年一月四日～三月二〇日、加藤瓢乎）から流行したとみるべきであろう。『葉武列士』は早い時期の珍らしいシェーキスピアの紹介で貴重であるが所謂「続きものの」流行とは直接の関係はなかったとみたい。⁽²⁾
やはり、従來說かれている通り、この年一月の「岩田八十八のはなし」が連載のはじまりであろうか。『明治事物起源』に「新聞小説連載の始」として

「東京絵入新聞」の主筆前田健次郎が千葉県の岩田八十八の裁判沙汰を馬琴風の文に綴り、明治八年十一月三日間連載して好評を博し、続き物語の始め、小説連載の始めをなせり

とある。この説に二三の注を付して吟味してみたい。その一、文中に「三日間」とあるのは二日間（二回）の誤りである。明治八年一月二十九日（月）、同三十日（火）の二日間、絵入り雑報記事として掲載されている。その二、「前田健次郎」とあるが、この頃「印務編集長代理」は高島藍泉（奥付）であり、「絵入新聞の記者藍泉が看客へおはなし申上ます」（明治八月九月一〇日、口上）などと活躍しているので藍泉とみるべきであろう。

この二回にわたって「雑報」欄に掲載された絵入りの記事は本年十月二十五日に召捕られ十一月二四日付で懲役八十日の刑に処決された岩田八十八の犯罪を報じたものである。警察や裁判所で取材した記事はこれまでも絵入雑報記事として珍重されよく見受けられた。しかしそれらはその日あるいは近日中に起った犯人逮捕、判決、処刑のニュー

スとして報じられた。犯人の身の上ばなしとか犯罪の経過、全貌に触れることがあっても、テーマとしては他の絵入りでない雑報記事と並んであくまでその日のニュース報道であった。ところがこの岩田八十八の話は十一年前の犯罪現場の説明から今日に至るまでの物語を提供するのが主眼となっている。第一回の挿絵は岩田八十八が短刀を逆手にふり上げて女房おみつを刺し殺そうとする場面で、書き入れには特に「この書は十一年まへの物がたりなり」と読者への断りが記されている。読者が今日のことかと誤解するのを防いだのであり、この種の注記は創刊号以来はじめてのことであった。過去に溯つての犯罪物語は文体は読本調あるいは合巻調（今日の事件を中心とするニュース報道の文体は人情本、滑稽本調といえようか）となり「此八十八の身の行末はいかなることをやなすやらん、そはまた明日の新聞にかたりいだすをきゝねかし」とか「却説、岩田八十八は」「実にも男は色情より其身を過るもの多きを此八十八がよき戒めみる人心にとめ賜はば記者が幸ひならんかし」の様な文章となった。雑報記事中の眼目であった絵入雑報記事についてはこれまで様々な工夫がこらされて読者の人気を獲得したのであるが、ここに二回連続の犯罪物語が提供されたのである。

しかし、後述する様に一〇回以上も連載する様な所謂「続きもの」が流行するのは明治一一年頃からであって、岩田八十八のはなしの場合は物語として分量が多くなったので二回に分けたとみることも可能であろう。この頃連載が流行した形跡はない。

（要旨）〔明治八年十一月二十九日〕——深川蛤町二丁目の船乗り岩田八十八は同じ町内の甚五郎の妹おみつと夫婦となった。しかし、おみつは生来不良心があって浮気がやまないので慶応元年秋に離別したが、その後もなれなれしく言葉巧みに何度も借金にくる。気のいい八十八は同情して金を貸し焼けばつくいに火が付いておみつとの交際が復活した。しかし実はおみつは燈台もと暗しで、同町の鈴木忠次郎の妻となっていた。その後、不貞を憤

った八十八と鈴木忠次郎との闘争が絶えず、同じ町内のことなので大屋も困り果て、八十八を呼び出して店をあける様命じた。思いつめた八十八は慶応二年八月三日の宵すぎ、おみつ夫婦が同衾する居間へ忍び入りおみつを刺し、行燈の消えた暗闇に生死を見きわめる余裕もなく逃亡した。(挿絵は八十八が短刀をふりあげておみつを刺そうとするところ。)

〔明治八年一月三日〕岩田八十八はその後、妻が死亡し、町奉行が犯人を探索していることを知る。日頃信ずる身延山の祖師を拝して後、自殺しようと身延山に登る。ここで高德の僧に出会い、僧侶となって各地の靈地を順拝し妻の菩提を弔い後世助かるのが妙法の道であると、さとされて全国順礼の旅に出る。その後、おみつの兄の甚五郎に会って許しを乞い、おみつの墓に参る。明治六年一月より千葉県葛飾郡に住って仏道に精進したが、一〇年一〇月二五日に召捕られた。しかし、犯した罪は御維新の大赦の前のことなので悉く許され、ただ逃亡して無籍となった罪として懲役八十日の微罪に処せられた。(挿画は身延山で切腹しようと諸肌脱いで刀を握る八十八を高德の僧がさとしていているところ。背景に寺院がみえる。「此画は昨日のつづき八十八懺悔のところ」と書入れがある。)

明治九年二月一二日より報じられた朝鮮の動静を報ずる記事は絵入りであり、純粹のニュース報道であるが連載形式の初期の実例である。以後、三月三・九・一〇にわたり連載されたが、冒頭に「朝鮮の漸昨日の続き」とか、末尾に「跡は追々に記します」とある。後述するが、この様な「雑報」(はなし)の連載の中からやがて文芸としての「続きもの」が生じたのである。

明治九年四月二六・二七・二八日（但し、二六・二七は挿絵なし）にわたって連載された華族、谷家の訴証事件の報道は連載の形式が整っている。

（要旨）谷家の当主、谷衛滋もりしげの妾・お久米は一男、二女を出産した後、谷家の親戚や家令・周防某の陰謀により、小使の平吉と不義があったとの無実の罪を押しつけられ、三人の子と共に追い出される。この騒動の中で小使・平吉は自害、その後、内々でお久米と交渉を続けた当主の谷衛滋も持病の喘息で空しくなった。そこでお久米と三人の子を預っている本郷春木町の竹原太郎兵衛はお久米と共に二月二十九日、谷家の家令、周防某等を裁判所に訴え出た。さる四月二十四日、谷家からお久米への慰謝料などについて判決が出され一件落着となった。

四月二十四日の裁判所の判決を二六・二七・二八の三回連続で報じたのである。「事長いから明日委しく出しませう」「昨日噂をして置た谷君たにきみのお妾のお久米……」「昨日の続き」などと記事の前後に記されている。雑報記事を如何に面白く読ませるかに努力が払われている。その点は「岩田八十八のはなし」も、傑作であるには違いないが、やはり同種の、犯罪を扱った絵入新聞雑報記事なのである。いずれにせよ、三面記事の書き方に、読者のため、記者が工夫を凝らしたということに落着くのではなからうか。

明治九年五月頃から二回連続の雑報記事が目立つ様になった。一例として五月八日、九日連載の甲斐国都留郡某村の平民市川次郎兵衛と娘おりんのはなしを検討してみよう。

（要旨）（五月八日）市川次郎兵衛は一九歳の娘おりんを連れ東京見物に上京した。道連れになった小間物屋の太助が親切に方々に案内する。市川次郎兵衛は足の痘の傷がひどくなって長逗留となり、路用の金が不足となったので太助に金策を頼み、その際言われるままに、どうせすぐ返済するのだからと娘の身柄を書き入れて担保と

した。其後、金も届いたので元利揃えて太助に返却しようとしたが、止むを得ぬ事情で返却期限の四月三十日に太助に会えず、五月一日に返却した。(五月九日)五月三日の夜、市川次郎兵衛とおりんは上野東照宮へ参詣し根津へ廻ったところで市川次郎兵衛は財布を落したことに気付き、おりんを待たせて、財布をさがし廻る。その間に太助が現れ、借金の返済がおくれたからと、おりんを金主のところへ連れてゆくといって乱暴しようとする。そこへ親切な武士が現れて太助を追払ってくれた。感謝する娘に無理に乞われてその武士は鼻紙の切れ端へ名を書いて渡す。その後、市川次郎兵衛はその侍を捜したが分らない。相宿の者に相談したら「お士族さん達は皆新聞を御覧なさるからは新聞屋へ願んでその名前を出して捜して貰ったら。」と教えられて東京絵入新聞社へ頼んだ。(挿絵として、侍の名を記した鼻紙のちぎれたのを掲載してある。)

以上、二日にわたる記事で、一日目の末尾に「其お嘶しは明日の事」、二日目冒頭は「(昨日の続き)」となつてゐる。

明治九年九月一二日は有名な高橋お伝逮捕のニュースが絵入雑報記事として取上げられているが、この一日だけで、連載ではない。後述する処刑に際しての絵入雑記事が、明治一二年一月三十一日(処刑の日)より二月二日までの一六回連載で報じられたのとは格段の相違がある。この頃はまだ連載は、せいぜい二回どまりで、盛んではなかったと思われる。しかし、一回だけといってもこの記事は、一面下段(三段目)より二面上段にわたる長文で、一面下段中央に挿絵がある。

「此間から大評判のあつた浅草御蔵前片町の旅人宿大谷三四郎方でお松といふ女が姉の讐を討たと言ふ事を委しく聞てみると」という書出しで、実は敵討ちどころかこのお松こと高橋お伝が男性遍歴の情痴の果、金に窮して自暴自

棄になつての男殺しの犯罪であつた次第を述べている。

（要旨）もと、この女は上州（群馬県）沼田藩広瀬某の娘でお伝という。二才の時、同国下本村の高橋何某方へ養女に貰われ成長の後、浪之助という髯養子をとる。その浪之助が癩病を煩つたのが不幸の始まりで、お伝は夫を連れて旅に出る。野州（栃木県）某村に滞在して湯治したこともあり、各地をさまよい、東京、横浜にも出て治療したが看病の甲斐もなく浪之助は明治四年に病死した。その年から独り身となつたお伝の男性遍歴が始まる。上州高岡の商人、小沢伊兵衛の情婦となつて神田仲町の秋元幸吉宅にいたが、近所の酒飯屋の小川市太郎とよい仲となつて駈落ち、房州辺をさまよつた。東京へ帰つて、小川と夫婦暮しをしていたところ、以前、お伝が借金した房州館山の船頭田中甚三郎から返済を迫られ、市太郎に言うとおどかされる。前に着物を売つたことのある古着屋の後藤吉蔵から借金して返済金にあてようと、お伝はよい着物を売つたがっている人があるからと先月二一日、言葉たくみに吉蔵に借金を申込んだ。二六日の夜、吉蔵が門口まで来て呼出し、二人で蕎麦屋で食事果して、今夜どこぞで泊つてゆると金の相談をしようということになった。お伝はまさかの時のため剃刀一挺を懐に入れて吉蔵に従い蔵前の旅人宿に入った。二階の八畳の間で酒盛りとなつたが、折をみてお伝が借金の話をして吉蔵はいい加減な返事で誤魔化して相手になつてくれない。その中に二人酔つて蚊屋に入る。明け方、お伝はまた借金のことを言つたが、すげなく断られた。かつとなつたお伝は、一旦は吉蔵を油断させ、寝入つたところを馬乗りになつて剃刀を両手で口の中へ突込み一えぐり、あつと一声立てようとするのを布団で押えつながら絶命させた。殺人の罪をのがれようと、「此者は五年前、姉を殺し、私にも非道の振舞があつたのを今まで無念の月日を過してきた。本日敵討ちを果したので姉の墓参りをした上で名告り出る……」と書付を死骸の側に置き、吉蔵所持の金を奪つて何喰わぬ顔で宿を出た。しかし、通報する者があつて自宅にかくれているとこ

ろを警察に逮捕された。

挿絵はその二階の八畳の間の蚊屋の中でお伝が馬乗りになって仰向けの吉蔵の口をめがけて両手で握った短刀、をさし貫こうとするところを画く。側に書付が掛けられ、筆と硯箱がある。書入れに「お伝が剃刀で殺すべき図を短刀に描いたは風と思ひ違へたの故看客へお詫を」と版刻の誤りを記者が詫びているのは滑稽である。

連載が盛んになるのは明治一一年春頃からであつて、四月二八日から五月二日まで四回（四月二八日・三〇日、五月一・二日）にわたつて連載された「お菊の嘶」が注目される。

（要旨）お菊は埼玉県下熊谷駅仲町の医者内田良仙の妹である。一一歳の時、行儀見習いのため大塚の安藤家に仕えた。殿のお手が付いて妾となり一女生まれたが、幕府瓦解し安藤家人滅らしのため実家へ帰され、間もなくお菊への扶持も出なくなつた。お菊は上州藤岡在の農家、佐太郎方へ縁付く。そこへ安藤家から依頼があり、お菊が生み落した娘・お蝶を引取ることとなる。

お蝶は成人して東京の女子師範学校へ入学した。お菊は浪費癖のある佐太郎と離縁しお蝶が成長するのを楽しみに小石川辺で家政婦をして一人暮らしを続けた。お蝶は山口県土族、福原讓蔵と恋仲となり、福原家へ縁付いた。お菊はいずれお蝶が自分を引取ってくれると期待して福原家をたずねるが、お蝶はこの実母を避けて会わない。嫌われたと知り、たまりかねたお菊は福原家近傍で自殺をはかる。死にきれずに後の山で首をくくるところを巡査が救出して、説諭の後、お菊の雇主へ引渡した。

以上の記事を「以下、次号」「お菊の嘶昨日の続」などと冒頭文末に記して四回連載したのである。最終回末尾に、警察の説諭に触れた後、「此末何となりますか深い事はいざ知らずお菊が過來し不幸は随分可憐な事でござります」と結んでいる。警察で取材したニュースを四回の情話物語に引延ばして書いたのである。

この種の絵入雑報記事連載の流行の中に明治一一年八月から有名な「金之助のはなし」が連載されて、これが今日、前述した「岩田八十八のはなし」と共に新聞小説の源と言われている。

金之助のはなしは、八月二一日～二八日、九月一日～一二日、計一七回にわたって連載された。⁽³⁾この記事については諸家も述べておられるし、拙稿でも触れたので重複するが、江戸の小道具屋の次男、染谷金之助という美男（一九歳）のはなしである。金之助は数寄屋町の小蝶（一八歳）という芸者といひ仲となつて家を勘当され、一時は金にまつて自殺しようとしたが、小蝶に励まされて大阪で生活をたて直そうとする。お供の悪番頭にだまされ一文無しとなつたが、北の新地の芸者小龍に助けられ、西京新聞の呼び売りとなつて真面目な生活を送る。その堅気の生活の様子が東京にも伝わり親許から勘当を許される。そこで小龍には礼を尽して別れ、東京へ帰つて小蝶を妻として商売に励んだという筋である。金之助の苦勞話したが、しかし、人情本の主人公宜しく二人の女に同情され、東京の小蝶から来た手紙をみて小龍が嫉妬する場面など興ある情話物語が展開している。例によつて「昨日の絵入金之助の続き」（冒頭）「怒を含む一段はまだ長ければ明日委しく」（以下、次号）（文末）などとあるが、八月二八日の末尾に「煙草入を我が腰へ差すところまでは彼地の通信者から報知がありました故跡は又探訪の上再び通信のありますまで一寸幕を引きますから看官^{みなさま}どうぞ其お積りで……」とオーバーに可笑しく記しているのは本来、現地からの「報知」「通信」「探訪」に基づいて記事を作成するという建前をもちつた冗談である。

この金之助のはなしについては次の二点を指摘することが出来る。その一は、これまでの絵入雑報の連載記事は警察、裁判所で取材した犯罪、事件の報道であり、虚実相半ばする脚色が施されていてもその本質は新しい出来事を報道する三面記事であつた。金之助のはなしは人情本風の物語であつて警察や裁判所での取材とは関係がない。その二は、これまでは東京のはなしであつたが、金之助のはなしでは大阪のはなしになっている。後述する「浪花話」の連

載を参考にしてもこの頃から東京や横浜以外の大阪、神戸のはなしをして読者へサービスしたことが考えられる。

「浪花話」は「金之助のはなし」に続く長編連載で九月二〇日～二十六日、十月八日～三十一日、十一月一日～八日にわたり一ヶ月余も続いた。その初回到「此間も金之助の長話してお欠^{おき}びをおさせ申ましたに又浪花の通信者から長い種が来ました故看客のお目を拝借して日永の（オット日は詰ったが）お笑ひ草までに綴り出す長物語は……」とある。梗概は省略した。

明治一二年一月三十一日に高橋おでんが死刑に処せられた。この新聞は早速同日付で「兼々府下に其噂高き毒婦高橋おでんはいよいよ今日は御処刑になるとか伝へ聞きました……其履歴の委しく聞込たる事もあれば明日より引続て御覧に入ませう」と報じ、明二月一日より二日まで休刊日を除いて十五回にわたって絵入、雑報記事として連載した。

この事件に関して「仮名読新聞」（社長は仮名垣魯文）は二月一日、二日と報じたが四日には連載を中止して絵入読本（合巻）として出版する旨断っている。この合巻が有名な『高橋阿伝夜刃譚』（たかはしおでん）（やしやものがたり）で仮名垣魯文作、守川周重画、初編から八編までが二月一三日から四月二二日にわたって刊行された（版元は金松堂・辻岡文助）。一方、「東京新聞」は二月一日よりおでんの一代記を連載し始めたが、やはり合巻『東京奇聞』の出版に切り替えた。新聞紙は散逸しやすく伝記も連載で切々と読みにくいので新聞記者の丹精の記事を残すために冊子に仕立て挿絵を加えた……と初編の序文（芳川俊雄）にある。『東京奇聞』は芳川俊雄関、岡本勘造作、桜斎房種画で二月一日より四月一五日にわたって刊行された（版元は島鮮堂・綱島亀吉）が、本書の出版は魯文の『高橋阿伝夜刃物語』と競合して行われたものであり、七編の序文（芳川春濤）にも「類板の世に出るを以書肆発売を急ぎ全部七帙僅か六旬にして業を卒ふ」と述べている。際物の合巻として両者出版、売出しのスピードを競ったのである。

この二種の合巻は毒婦ものの流行した明治合巻中の傑作として有名であるが、「仮名読新聞」と「東京新聞」は何

故、速報性のある新聞記事の連載を中止して合巻の出版に切替えたのであろうか。このことについては絵入雑報記事の連載を続けた「東京絵入新聞」と比較して考える必要がある。落合芳幾と二世為永春水（染崎延房）との挿絵と記事と連携した絵入雑報記事連載の機能が他紙を圧倒したのではないだろうか。草双紙合巻は社会の流行の風俗や事件を絵本に仕立て、浮世絵と共に江戸時代から庶民に親しまれてきた。「仮名読新聞」「東京新聞」は結局、新聞記事の連載を断念して、合巻という古い出版形態の単行本の刊行に切替えたのである。この時期まではまだ合巻の流行があり、この二種の合巻は有名であるが、巨視的にみれば明治期の合巻という出版形態は明治十年代を以て終了する江戸文芸の末期の衰弱した出版活動の最後の足掻きであって「新聞」には対抗出来なかった。

東京絵入新聞の絵入雑報の速報性とこの連載を市民の毎日の読みものとして定着せしめた魅力において、毒婦高橋おでんの処刑に関してはこの新聞の勝利は明らかであった。この頃の新聞の読者の動向については若干溯るが「私は此頃では草双紙を廃止^{やめ}て毎日、新聞を取って見ますが為になる事もあり可笑しい事もあって余程面白いがネ」（東京絵入新聞、明治九年三月一八日）といった記事も散見される。挿絵の機能を生かし、画文一体の連載記事を毎日提供した絵入り雑報記事に新時代の読みものとしての魅力を購読者は感じたのである。

二 続きもの——創作の連載

これまで触れてきた絵入雑報記事には表題（作品名）、作者名、回数が表示がなかった。記事の冒頭にある「某々のはなし」というのは「雑報」欄中の記事であることを意味する一般的、便宜的な題として親しまれてきたが、純粹にテーマを示す作品名とはいえない。

明治一二年六月に「田舎裁縫鯉染衣」^{ふなわじにてこのものが}（回数）を題名とし「古川魁萱子稿」と署名のある連載の絵入雑報記事がは

じめて登場した。⁽⁵⁾この作品は六月八日(第一回)より七月一七日(第二十回)まで二〇回にわたって連載されたもので内容はともかく形式は現在の新聞小説の形態を完備している。⁽⁶⁾

(梗概) お絹と類平の蛍狩の夜の逢引から書きはじめられている。お絹は島根県通摩郡大森宿の老舗の小間物屋の娘、類平はその先隣のさる大店の番頭を勤める橋本屋友造の長男である。ひそかに交際を続けるうちにお絹は類平の種を宿した。類平に同郡浜村の農家上屋何某との縁談があった節、類平はお絹のことを母お沢に打明けた。お沢はお絹が立派な家の娘なので、父親・友造の機嫌をとってお絹と結婚させようと相談してみたが、友造は親の知らぬことと裂火のごとく憤って許さない。結局、類平は親の勧める嫁、お滝と結婚した。お絹も類平のことが忘れられないままに、出産、乳呑児を子供をほしがっている家に里子に出して、住屋という商売家に乞われて嫁に行った。

類平の新妻お滝は、その後、「髪切り」という姿の见えない妖怪変化に襲われることとなる。ある夜、なまぐさい風が吹いて来て一団の陰火に目がくらみ、気絶した。介抱されて気が付いてみると島田に結った髪が根元からひきちぎれて遙か彼方に、髪飾りにかけた半掛もそのまま落ちていた。その後、悪夢にうなされて発熱し、夜中に急に起き上ってうわごとを言ったり、得意の機織りの布が寸断されていたり、不思議なことがおこる。これはお絹の生霊の仕業で、お滝は実家へ帰るとすぐ健康になり何事もおこらなかつた。

住家の長男・何某は美人のお絹を愛するが、お絹は類平を忘れかね、いつも上の空で落着かない。その中にお絹の道具の中から類平の恋文が顯れ、子供を預けてきたことも分り、離縁となる。

類平の嫁お滝は実家では無事であるが類平の家へ帰ると瀕死の重病に犯される。何かの祟りで、このままでは生命も保証したいと両家で相談して離縁することとした。お滝はその後、婿養子を貰い男子をもうけ、明治十

二年の今日まで幸福に暮している。

類平は父親元造が亡くなり一家の柱として真面目に働いた。本店の主人からも信用されて番頭に取立てられる。ある年、年始の帰り道にお絹と出会い、これより二人の仲は旧に復して深くなる。類平の母は折りをみてお絹の親許へ縁談を申込み、類平の主人からも許しが出了。婚儀は明治四年にめでたくとり行われ、その後、女子が生まれ、兄に当る男の子も今年、我家へ呼寄せて世継とした由である。文末は「……奇しき縁の噂から過にし事の洩聞えて斯は紙上に今日まで記綴る事となりしも深き由縁のある事ならんと愛度爰に局を結べど廻らぬ筆のしつけ麻に裁縫あげたるものなればお氣に入らぬは幾重にも御海恕希ふと伏してのぶる(大尾)」と結ぶ。

二〇回の長編で、多くは第三面あるいは第二面に挿絵入りで扱われるが、挿絵のない場合もあり、時には第四面で埋草の様な扱いをされる場合もある。大きな雑報記事があつて紙面が足りない場合、記者、魁蕾子の原稿は挿絵抜き、筋書き程度のものに縮められて第四面に置かれたのではないか。またこの頃は実話の続きもの「お福の履歴」(無署名)が絵入りで発表され、この方が魁蕾子稿よりは優先して扱われている様である。大まかに言えば、

- 1 犯罪・情痴事件等のニュース。
- 2 事件に密着した実話の続きもの。
- 3 魁蕾子の稿の順序で扱われた様である。

「髪切り」など草双合巻風の妖怪変化を想わせる古川魁蕾子の習作であるが、題名、回数、署名の形式は整っている。創作であるが明治四年とか十二年とか年月日を付け何時、何処で、誰が、何を、如何にの新聞記事風の書き方に仕立てているのが微笑ましい。

「田舎裁縫鯉染衣」に続いてこの明治一二年においては「末露結高茅」横浜鱸孝報、七月二四日～二六日(三回)、「岩ねのきく」(無署名)八月三〇日～九月二〇日(二三回)、翌明治一三年「野路の花」子謙粹史報、二月一七日～五月九日(四五回)、「籬の菊」魁蕾子稿、八月三日～九月二二日(四十回)、「郊外の若草」(無署名)、十月六日～一

九日（二一回）、「渋谷家興敗の顛末」魁蕾子、一〇月二八日～十一月八日（二〇回）、「覚ての夢」転々堂主人（藍泉）稿、一〇月二四日～二月二五日（二五回）などが発表されている。このうち長編連載の「岩ねのきく」と「野路の花」の梗概を紹介してみよう。

「岩ねのきく」は無署名で明治一二年八月三〇日より九月二〇日まで一三回にわたって発表されている。但し完結していない。

（梗概）江戸に西村元七という漬物屋がいた。妻と二男三女あったが、妻は浮気で町内のある男と道ならぬ忍びあいが続けた。長女お菊は思いきって母に注意したが、聞き入れず、家の金を持出し男と手を取り四人の子を棄てて行方知れずとなった。お菊は家事から店の雑務までよく働いた。父は、不幸なことに、安政三年秋の末にラッキョウの仕入をするため日光街道を通りかかったところ山賊に襲われ仕入の金を奪われた上殺される。両親と生別、死別したこの四人の兄弟姉妹は不幸に耐えて強く生きようと決意した。鉄蔵と伊和蔵は三河町の時計商、青木某方で働き認められる。鉄蔵は西村鉄蔵と名告り当時新しい商売であった時計屋を開業して一旦は成功するが、金策に窮し発狂して家名絶える。伊和蔵は青木の店の年期もあいたので、塗物屋京屋佐助家へ養子縁組の話があり、娘お糸と見合いする。京屋の親は結局この縁談を許さなかったが、お糸は伊和蔵が好きになり、或夜二人駈落ちする。

お菊は大名へ出入りする柏屋弥八の妻となっていたが、そこへ伊和蔵、お糸が訪ねてくる。親分肌の柏屋は二人に商いの元手として十五両渡した。伊和蔵は神田橋外の鎌倉河岸へ時計の店を出し真面目に仕事した。その後、お糸の実家も二人を許し、出入を許す様になり、柏屋弥八が間に入って伊和蔵は正式にお糸の家の養子となった。

その後、お菊は夫に死に別れ生活が苦しくなったが、伊和蔵は養子の身の上であり世話が出来ない。お菊と伊和蔵不仲となる。その後、伊和蔵は川崎の川泉の娼妓お光と馴染み、請出して東京の小川町に移らせた。このお光の家を基礎として、姉おしほの娘のうちから一人を貰い養子として実家を再興しようとする。

浮気な母親が男と家出し、父親は賊に殺された。残された四人の薄幸な兄弟姉妹が励ましあつて生きてゆく状況を実話風にのべる。薩州家出入りの古い漬物屋がほろび、新時代の花形の商売である時計屋が繁昌するなど時世粧がよく描かれている。一三回で中断したとみられるが、筋も大体は終了しており書き続ける余地は乏しかったと思われる。

「野路の花」は署名欄「子謙粹史 報」で明治一三年二月一七日より四月一日まで三一回にわたって発表された長編である。

（梗概）千住宿のお花と芳之助は相想相愛の仲であったが、親から結婚を許して貰えず、墮落しようと思つた。ある夜芳之助は路用の金百円を家から持出しお花と出会ったが、そこへ曲者が現れ、芳之助を樹木にしばりつけ女と金を奪つて去る。芳之助は今更、家にも帰られず一旦は自殺しようと思つたが、お花を捜すため生きようと決意する。宇都宮へ出、明神下の野州屋という呉服屋に奉公したが、働きぶりを認められて近所の上州屋という呉服屋の番頭にとり立てられた。一方、お花を奪い去つたのは千住宿のならず者三太で、草加駅の伯母にあたる悪党の女に相談してお花を宇都宮の何某という貸座敷へ売つた。その何某は親分肌の男でお花がかどわかれた事情を知つて同情し、お花に勧めて芸者になし、芳野屋小花と改名させた。名弘めは「お花が家出の翌月即ち一昨年十二月十日過の事にして……」とある。

芳野屋小花は宇都宮で有名となった。近所の学校の先生で青木という男から友人の酒井を介して女房にと申込まれたが、芳之助のことが忘れられず、同僚の小糸を身代りに推薦する。芳之助は料理屋で芳野屋小花の噂を聞き、もとは千住の呉服屋の娘と知ってお花に間違いないと会おうとする。しかし、急に主人の命で大阪の支店へ出かけることとなった。大阪支店の番頭の藤兵衛が店の金を持出し馴染の芸妓と駈落したので、その整理にあたったのである。

真面目な芳之助は支店の整理に尽力したが、北の新地の播磨屋といふ貸席でお花と生享しの芸者鈴吉と会って心がぐらつき馴染となつて通いつめ、本店へ持帰るべき金八十円を費いこんでしまった。鈴吉は芳之助を励まし、貯金六十円を出し、その内三十円を楼主に渡して隙を貰い、三十円を芳之助に渡して二人で宇都宮へ行つて主人に詫びることにした。芳之助は主人に遣いこみを正直に白状した。主人は一旦は憤ったが、これまでの芳之助の働きに免じ親切にも百五十円出して鈴吉（本名、お嘉）と夫婦にしてやろうと言う。ここで芳之助はお花とお嘉という二人の女への愛情と義理を貫くため、お花を探して正式の結婚を申入れ、お嘉には店を持たせて、その後、青木の友人の酒井と結婚させた。酒井とお嘉との婚礼の場一同集まりめでたしめでたしで終っている。

この婚礼については「いと賑やかに聞きたりしは実に昨年十二月二十八日のことにして……」とある。

文末は「近頃稀なる大団円と子謙粹子の報道により廻らぬ筆に長々しくも今日まで紙上塞げしは日を古川の水絶えずお叱りを受ても筆の花まだ咲出ぬ魁薔子が嗚呼なる筆を御許容を願ふ」と結ぶ。子謙粹子とは古川魁薔子のことであった。人情本風の長編であるが、処々に、年月日を入れ、一昨年即ち明治一年のお花、芳之助の家出より昨年二月二八日の婚礼の場までの実話として、あるいは（新聞の）雑報記事として読める様に書かれている。「田舎裁縫纏染衣」と同様、多くは三面、二面に挿絵入りで扱われているが、四面上欄に挿絵もなく埋草風に掲載されている場合

もある。犯罪などの雑報記事の分量が多い場合は四面に廻されたのであろう。また「某々のなし」風の続きものも盛んに連載されていて、その扱いは魁薺子稿より優先している様である。

以後、この調子で続きものが連載されるが、明治一三年一〇月二八日より連載された「渋谷家興敗の顛末」、および同一〇月二四日より連載された「覚ての夢」について気付いた点を述べておきたい。

「渋谷家興敗の顛末」は明治一三年一〇月二八日より一月一八まで一〇回にわたって連載された。魁薺子の稿である。第一回冒頭に次の断り書きが掲載されているのが注目される。

○左に掲ぐる長物語は事古にたる嘶しなれどもその顛末を知る人より詳細く報知ありしまま勉めて潤飾を加へずして今日より続てものすれど本の雫を記さねば露となるてふ末の事をいかで知るべきよしなければ余義なくてそのかみ成立し事跡を摘んで掲ぐるゆえ旧聞に属すると長々しきを咎めたまはで緩々一読したまはば……魁薺子識本来、本日のニュースである雑報欄に純粹の「事古にたる嘶し」「旧聞に属する」ことを掲載することには抵抗があった。「本の雫を記さねば露となるてふ末の事」が分らない云々と苦しい言い訳を記しているのである。前述した犯罪や情話の続きものにおいても過去に溯って話しを進めることはよくあることである。しかし、中心は現在の事件の解説であつた。ところがこの渋谷家の物語は純粹に過去の話なので特に断つたのであろう。この辺から、本日のニュース、雑報というテーマから全く切離れて昔のなしを読み物として提供することが始まつたのではなからうか。⁽⁷⁾

明治一三年一〇月より二月二五日まで掲載された「覚ての夢」——転々堂主人稿——も従来の犯罪小説、情話物語風の続きものとは異りこの有名な作者・高島藍泉に特別に依頼して純粹の読み物を掲載したもので、ニュース（雑報記事）的性格は認められない。第一回の附記によると、近頃、友人「平々子」が旅行の帰途立寄って「一新話を以て羈旅の土産に換ふ、其事たるや因果応報の道理を示して……」興味ある話であつたので掲載することである。

一般の続きものと形態は似ているが、内容、扱い方は別格の様である。この辺から、著名人が「作品」を絵入りで連載することが行われる様になったかと思われるのである。

東京絵入新聞は明治一四年一月四日より紙幅を大にし挿絵を増殖することになった。本日の記事「本社新聞紙革面の履歴」(局長前田健次郎筆)によればこの新聞は創刊(明治八年四月十七日)以来本年まで六年間に三回、この度を加えて四回の新聞紙面編集方針の改革を行っている。今回は、紙幅を広くし、段を十五段(一面三段、二・三・四面それぞれ四段)に分け、挿絵は「六図より多からず三図より少からず」と定めた。記事の分類は従来そのまま、公聞(おふれ)、雑報(はなし)、投書(なげぶみ)、広告(ひろめ)、物価(そうば)である。この中で本稿が問題とした「雑報(はなし)」欄中の記事を私に分類してみると、

1、宮中、政・官界、軍人の動静(法令などは「公聞」に掲載) 2、昨日または最近、起った事件ニュース、3、最近起った事件(犯罪、情痴事件等、警察や裁判所で取材したものが多い)の続きもの。文学的解説あるいは実話の連載。これらは「某々のはなし」と見出しを付ける。4、創作の続きもの(題名・作品名、著者署名、回数の表示がある)。

右の3、と4に挿絵が入るのである。(他にもう一ヶ所が二ヶ所、これはニュース報道の記事に挿絵が入る。) 4、創作の続きもの、において新聞小説の形態が確立して現代へそのまま継承されていると思われる。しかし、この形態の中に「小説」(ノベル)が掲載されるのは、坪内逍遙を迎えて紙面の改革をする読売新聞が明治一九年一月より掲載した「鍛鉄場の主人」(加藤瓢乎訳)まで待たねばならなかった。本稿は新しい西欧仕込みの小説が掲載された新聞紙面の絵入りの形態が、すでに明治一一年〜一二年頃、⁽⁸⁾「続きもの」として成立していた事情を窺ったのである。

浮世絵や中本や草双紙合巻を愛好した庶民層の文明開化の伴侶として、新聞は彼等の期待に応えてこの連載の紙面を工夫し、やがてノベルを鑑賞する新しい市民層を育てて行った。しかし、その場合も新聞小説が掲載される絵入り雑報記事の形態は明治十年代初頭以来今日まで変ることはなかったのである。

注

- (1) その後、明治九年三月二日、第二百八号より「東京絵入新聞」と改題した。
- (2) 因に東京絵入新聞は明治一九年一〇月九日より「葉武列士倭錦絵」（羅笠隠居堂史——仮名垣魯文——訳）を掲載した。（十一月一六日まで）一〇月九日の記事に「当絵入新聞第七十二号（明治八年）九月七日の紙面より同九日、十日と第三回まで其筋書を記載せしが未だ時好に適はずして先王の幽霊と共に立消えしも疾十二年の昔と成行……」とある。
- (3) この頃の奥付は「局長前田健次郎 仮編輯長箱田千代太 印刷人染崎延房」とある。この頃は明治九年一月入社した染崎延房（二世為永春水）が記者として活躍しているので、「金之助のはなし」の書き手は染崎延房で前田健次郎（香雪）校閲とみたい。
- (4) 「草双紙から新聞小説へ——開化期文化の底流——」国文学研究資料館紀要第一四号（昭和六三年三月）「新聞小説の発生——熊本新聞を読んで——」同上第一六号（平成二年三月）
- (5) 「浜の海松」荒磯鯉平報が五月三〇日より六年四日まで（第一回／＼第五回）発表されているが、回数が少ないので、ここでは初出の代表的作品として「田舎裁縫鯉染衣」に注目して解説した。なお、古川魁奮（安政一／＼明治四一）は二世為永春水（染崎延房）の弟子で岡本起泉、饗庭篁村とともに三才子とよばれた。二世春水の「金之助のはなし」に続いてこの作品が発表されたことに注目したい。なお、この様な題名（作品名）を備えた続きものが現れたのは「熊本新聞」の場合は明治一三年九月一日より七回連載された「恋衣故郷の錦」（注4参照）であった。明治一二年から一三年にかけて続きものが全国的に流行し始めたことが考えられる。
- (6) 但し、絵師の署名はない。新聞社専属の絵師が読者に周知されていたからか。現在の新聞小説には作家と並んで挿絵画家の署名が掲げられ、これと重ねて挿絵そのものの中にまで画家の署名が記入されている場合も多い。挿絵画家の問題としてこの点いづれ考察してみたい。

(7) 因に、明治一六年六月六日より連載された「栗原百介の伝」にも作者、魁薺子の附記（六月六日）があつて「……上記し始めし栗原家のはなしはその原因を古き幕府の治世より説き起したれば維新の今日に至る迄は数十年の星霜を経……看客幸に文の拙きと事の旧聞に属することを咎めたまはず事実の精確なると今日まで推し及ぼす榮枯得喪の跡とを知了したまはんに於ては編者の此上なき僥倖にて……と」断っている。毎日のニュース報道を使命とする新聞の続きものとしては「幕府の治世」の頃の「事の旧聞に属する」物語はやはり抵抗があつたのである。しかし、この様に断り、理くつづけながら、伝統的な豊富な講釈、実録の材料が新聞の続きものとして編集される途が開拓されて行つた。これは作者の思い付きによるというよりは新聞の読者の要望によると言うべきであらう。新聞という活字印刷の新形式が出版界を制覇しても江戸時代以来の人々の好みは一朝一夕には変らなかつたのである。

(8) （創作の）続きものの掲載のはじまりは熊本新聞の場合は明治一三年九月一日より七回にわたり発表された「恋衣故郷の錦」であつた。（注4拙稿）明治のはじめに全国一斉にはじまつた活字日刊新聞紙の出版は百花繚乱の観があるが、（創作の）続きものの出現は中央も地方もほぼ明治一〇年代初期とみて大きな狂いはないと思われる。